

東奥義塾高等学校 教諭 川村 泉

高校生による海外エネルギー事情研修会では、個人の旅行では決して学べないことや体験できないことを数多くさせていただきました。本当に幸運だと思いました。ここでは高校教諭の引率者という立場から感じた様々なことを書き留めたいと思います。

1. 事前研修会について

体力不足の私にとって事前研修会は過密気味でしたが、先人たちのアドバイスを元になされた内容は、何一つ無駄なものはありませんでした。特に第1回事前研修会で行われたエネルギーに関する講義の効果が2月末の座談会で明らかになり、事前研修の重要性を改めて感じました。というのも、生徒たちの感想から、みんな自分の知識不足に焦りを感じて研修後に熱心に調べたり、教員に教えを乞うたり、自分の学校の生徒たちにアンケートを実施した生徒までいるとわかったのです。彼らが出す成果物だけを見ると、もともとどれだけの関心や知識があるのかを窺い知ることはできないので、私は少々誤解していたようです。それぞれの生徒が事前研修を通して自分の無知を知り、それをそのままにせず、海外の生徒と堂々とやり取りするまでに自分を向上させたことを誇りに思います。

プレゼンの練習は回数を重ねるごとに上手くなっていくのを感じました。たくさん大人からの様々な意見やアドバイスを受け止めて取り入れていく生徒たちの素直さや柔軟性に好感を持ちました。人と語るには、どうしても語る言葉（知識と意見）が必要ですし、加えて度胸や勇気が必要です。事前研修での学びと練習で、生徒たちはそれらの下地を身に付けることができたと感じています。

2. 選ばれた生徒たちについて

一人一人の持ち味があって、個性的でした。自ら手を挙げてこの企画に応募してきただけあって、意欲的で向上心があり、踏ん張りどころで頑張れる生徒たちだと思いました。旅先でも帰国してからも、みんな口々にスウェーデンの生徒たちを個性的でクレイジーだと言っていました。私の目からみたらあなたたちも十分個性的でクレイジーよ、と思っています。もちろんいい意味で、です。各学校で授業中にプレゼンをすることがあるのでしょうか、みんな始めから人前で話すことにそれほど抵抗を感じていないように思いました。準備してくるパワポの資料も動画の埋め込みなどの工夫がそこそこにあるほか、大人からのアドバイスにも対応して、レベルが高いと思いました。ほぼどの場面でも必ず一人一回は現地の高校生や大人に質問を投げかけたり、意見を発言したりする姿は頼もしかったです。毛色の違う生徒たちは、困ったときには互いに助け合い、楽しいことは共有し、とても良いチームだったと思います。

3. エネルギー関連施設について

日本の原発関連施設に入る際の厳重な管理体制には驚きました。これまで体験してきた中で一番厳しいセキュリティチェックでした。担当者の方々の説明は丁寧でわかりやすく、生徒たちは理解を深めたと思います。

海外研修で印象的だったのは、スウェーデンにもフランスにも、出向している日本人がいたことです。スウェーデンでは当初の計画通りの訪問ができない場面もありましたが、違ったからこそ、フォルシュマルクの施設に出向中の日本の方に日本語でゆっくり説明してもらうことができ、幸運だったと思います。フランスのラ・アーク再処理工場に出向中のお二人はどちらも青森県出身で、それだけで親近感が湧きました。生徒たちも海外で働くことは意外と自分にも起こりえるのだと感じたのではないのでしょうか。

スウェーデンのKSU訓練センターは徹底した練習メニューでした。また、建物内に心理学者が常駐して訓練生の心の在り方も見守っている点に安心感を覚えました。私たちを案内してくれた方が、「一番大切なのは安全。一人一人の行動やチームとしての行動が大事なのだ」と語っておられたことが心に残りました。

フランスのオラノ社ラ・アーク再処理工場では専用の衣服に着替え、施設内の見学をさせてもらいました。高レベル放射性廃棄物の貯蔵室に入る時は、緊張で身震いしました。ここまで見学者を入れるということは、それだけ安全性に自信があるということなのでしょう。ただ、私は一部の汚染検査の機械が古く、調子が悪くなっているのが気になりました。今後もフランスの事故ゼロの記録が更新されていくことを願うばかりです。

4. 現地高校生との交流について

文化交流では、けん玉、こま、折り紙、書道、コスプレ、ねぶた衣装、そして日本の駄菓子を現地高校生と楽しみました。予定の一時間半はどちらの国でもあっという間に過ぎました。日本の伝統文化はもちろんのこと、マンガ・アニメ・ゲーム文化は海外高校生たちに浸透していると感じました。文化交流の事前練習をしていなかったからか、日本の生徒たちが戸惑ってしまう場面も多少ありましたが、お互いに助け合ったり、引率者の手を借りたりしながらも、最後までやり切っていました。どの体験コーナーも大盛況でした。全体的にどちらの国もアドリブが多くて、日本側の柔軟性や対応力が試されたように思います。生徒たちはSNSのアカウント等を交換し、研修会が終わった今でもやりとりをしているそうです。同世代の外国人の友人を持つことのなんと幸運なことか！この研修会で得た繋がりを末長く大切に育てていってほしいと思っています。

【スウェーデン:ヴァッテンフォール高校】

スウェーデンの人々の英語力の高さには驚きました。私たちとの会話も、プレゼンもすべて英語で行われ、ここは英語圏かしらと思うほどでした。また、個性に合わせた教育を受けているためか、自己受容がよくなされており、他者のこともそのまま受け入れている雰囲気がありました。終始リラックスした印象で、積極的に発言していました。当該高校は理系の高校だったのですが、女子が少ないことを改善しようと活動する女の子たちがいました。日本でも理系に進む女子を増やす試みを大学がしているのを思い出し、国を超えて共通の課題があることを思いました。

また、当該高校に訪問するのが初めてだったこともあり、段取りがあまりうまくいかず、スウェーデン側のプレゼンが途中で打ち切れそうになった時のスウェーデン生徒の悲鳴と非難は忘れられません。まだ発表していないグループの男の子が担当の先生に「通訳はいらない！俺たちは英語を話しているじゃないか！あの子たち（日本人）だって英語がわかるのでしょうか？」と交渉していました。英語ができるのが当たり前、という考えが心に刺さりました。その後プレゼンを終え、日本文化の交流はできたものの、エネルギーディスカッションが行えなかったことは残念でした。座談会でもディスカッションがしたかった、との声が聞かれ、これからは割愛せずに短時間でも実施すれば良いと思いました。

【フランス:グリニャール高校】

フランスの生徒たちはフランスの学校生活について日本語でプレゼンしてくれました。資料内の日本語が不思議な表現になっていたりするところもありましたが、日本の生徒たちは嬉しかったと思います。時間をかけて準備してくれたことが伝わってきて、熱心に聞き入っていました。フランスでは無事にエネルギーディスカッションを行うことができました。生徒たちはお互いに堂々と意見を述べ、質問もできていたと思います。シャイで内気な日本人というイメージを払拭する活躍でした。

私と同じ名前のフランス人学生がいて、お友だちになることができました。彼女は「原子力発電は健康と環境にとって確かに危険だけれども、他の解決策が見つかるまではまだ必要。エネルギーを他国に依存するのは避けたい。」という意見を持っていました。環境だけでなく、地政学的な観点からも考えていることに感動しましたし、私のクラスの生徒たちにも日本のエネルギーについて自分の意見を述べられるようになってもらいたいと強く思いました。

5. 文化体験について

【スウェーデン】

生徒たちはストックホルムの市庁舎やロイヤルシーポートが印象的だったようです。沈没船をそのまま展示したヴァーサ号博物館も圧巻でした。公認ガイドの博多さんがいたからこそ見られたスポットや得られた情報もあり、心から感謝です。

食に関しては、どの料理も塩気が強く、しょっぱ口の青森県人の私からしてもしょっぱかったです。これも実際来て、食べてみないとわからなかったこと。良い体験でした。世界一臭い缶詰、シュールストレミングは時期ではないとのことで、食べられませんでした。トナカイ肉は私は少々臭いを感じましたが、生徒たちには好評でした。

【フランス】

青空の下のモン・サン・ミシエルの美しさは筆舌に尽くしがたいです。中をゆっくりと見学できたことも幸運でした。フランスはバス移動が長くて辛いですが、モン・サン・ミシエルでの感動は生徒たちの心にも深く刻まれたようです。

ノートルダム寺院やエッフェル塔、凱旋門は外から観るだけでしたが、個人的にはそれで充分だったと思います。ベルサイユ宮殿やルーブル美術館をゆっくりと、ガイドの小林さんの詳しい解説を聞きながら回れたことは本当に贅沢でした。生徒たちもじっくりとフランスの文化や歴史を感じる事ができたと思います。

食に関しては、本場でフォアグラを食べられたことは良い経験になりました。生徒たちは好き嫌いが分かれていましたが、体験できたこと自体が良かったと思います。私個人はレストランのコース料理は量が多くて、残してしまうことがありました。夕飯の時間が遅めであることも胃もたれを促進させたのだらうと思います。生徒たちは夕飯後にお菓子パーティを開いている日もあり、元気に過ごしていました。

6. 英語力について

座談会での感想で、自分の英語力の不足を感じたという生徒が多かったことに、私は一人の英語教諭として、申し訳なさと同時に嬉しさを感じました。申し訳なさは「話す」「聞く」になかなか舵を取れない学校教育に対して、そして嬉しさは彼らが本当にいい経験をしたということに対してです。言葉がわからない不安、言いたいことが言えないもどかしさ。それは体験してみないとわからない感覚だと思います。私自身も高校一年生の時にした海外ホームステイで、英語力不足を痛感し、帰国後すぐに英会話学校に通い始めた過去があります。英語がもっとできるようになりたいと思うことは、大きな動機付けです。そして自分の中から出てきた動機は長く持続します。生徒たちのいう「英語ができる」はおそらく「話せる」であり「聞ける」のことだらうと思います。だったらなおさら学校での文法練習や文章読解は大事にして欲しいと思います。4技能(話す、聞く、書く、読む)はどの技能の根底にも文法があります。文法を知っていればすべての言葉を丸暗記せずに済むばかりか、応用して自分で文を作ることができます。文法学習は決して無駄ではないのです。受験英語はアカデミックに活躍したいならば、知っていて損はないです。もし学校の授業に会話練習が足りないと思うのであれば、巷に溢れる会話練習アプリを利用すれば良いのです。ほとんどが無料で利用できます。エネルギーMIXと考え方は一緒。上手に組み合わせれば良いのです。全部を自力でやるのは無理がありますし、全部を学校に求めるのも難しいでしょう。今あるもの(学校教育)を活かしつつ、足りないものを自ら補って、英語の力をこれからどんどん伸ばしていったほしいと願います。

7. 最後に

研修中、日を追うごとに度胸がついていく生徒たちを感じていましたが、座談会や知事への報告会で話す高校生たちの姿、そしてその内容を聞いて、さらに成長を感じました。自分の目で見る海外、外から見た日本、外から見た自分。自分目線だけだった世界が、相手目線を知り、俯瞰の目線を持つようになり、世界が広がったわけです。それはとてつもなく大きな変化だと思います。今回の旅で得たたくさんの気づきを、これからの生活に活かしてくれたらと願います。

たくさんの人に支えられてこの研修を無事に終えることができました。主催してくださった青森県商工会議所連合会のみなさま、旅行会社や添乗員のみなさま、現地ガイドの方々、訪問を受け入れてくださった各地各施設のみなさま。バスも飛行機も新幹線も、私たちを安全に運んでくれて感謝でした。私は加えて、送り出してくれた東奥義塾高等学校、そして家族のみんなにも感謝です。一緒に引率して下さった方々、縁の下で準備・運営で奔走して下さった方々、本当に心から感謝申し上げます。

この素晴らしい機会がこれからも高校生に与えられるように、そして参加者がその経験や知識を周囲にますます発信していくことができるように祈念いたします。